

メガネサナエ *Stylurus oculatus* (Asahina)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は62%、現存数は5であり、絶滅危惧Ⅱ類に相当する。

本種は土着ではなく、移入の可能性があるととして準絶滅危惧としていたが、琵琶湖・淀川水系以外では愛知県と長野県にしか現存しないこと、さらに両県とも個体数の減少が著しいことを考慮し、絶滅危惧ⅠB類に変更する。



♂. 長久手町原邸, 1974年8月19日, 鶴殿清文 撮影

【形態】

腹部第7から9節が著しく広がった大型のサナエトンボである。

和名は顔面の黄色斑をメガネに見立てたことに由来する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張から西三河にかけて分布し、名古屋市周辺の複数の河川、愛知用水、矢作川など13市町村で記録されている。東三河には分布しない。

【国内の分布】

本州東北部から中部にかけて記録されている。

【世界の分布】

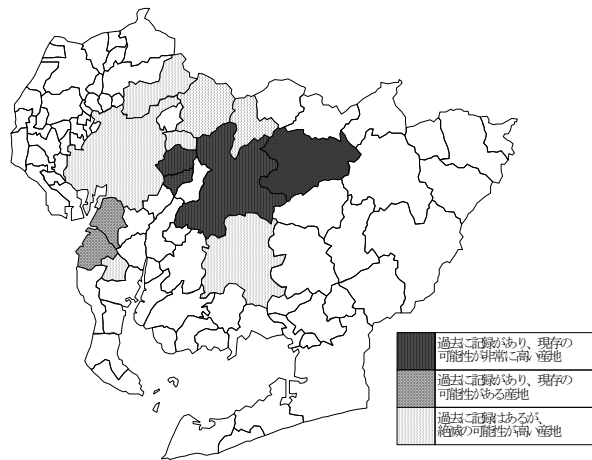
日本特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、羽化場所より上流の河川で見られる。また、琵琶湖のような湖では湖岸でも見られる。未熟成虫は、かなり移動することがある。幼虫は、湖、河川のワンドなど非常に緩やかな流れに生息し、深い部位を好む。

成虫は7～8月を中心に羽化し、成熟成虫は8～9月頃に見られる。幼虫期間は複数年と思われる。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

現存するのは矢作川と愛知用水のみ。矢作川のダム湖で得られた羽化殻の数は、2017年に数百個、2018年に数十個、2019年に数個と激減しており、2020年には確認できない可能性もある。愛知用水の途中にある愛知池では羽化殻が近年減少しており、また佐布里池では2018年の調査で全く確認できなかった。佐布里池に近い東海市で2018年に成虫が1頭確認されているので、佐布里池からわずかに羽化している可能性はあるものの、愛知用水での本種の存続も危うい状況にある。

本種の幼虫は川底の土質の選択性が非常に狭いので、河川環境が変化すると生息困難になる。また流れの緩やかな場所を好むので、川底に残留する農薬等の影響を受けやすいと推定される。

【保全上の留意点】

- 1) 河川の水質汚濁の防止（特に毒性の強い農薬等の流入防止）
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保

【特記事項】

矢作川のダム湖で本種が激減した原因は、農薬等の有毒物質ではないかと推定している。理由は、①本種の好む川底の土質環境は現存する、②見た目では川の水が汚染された様子はない、③メガネサナエと時を同じくして他種の羽化殻や幼虫も激減または絶滅している（特にホンサナエやアオサナエなど春のサナエトンボ類で顕著）、④ダム湖本体とは対照的に、ダム湖に流入する河川では他種のヤゴは以前と同じように確認できる、という4点に因る。

（吉田雅澄）